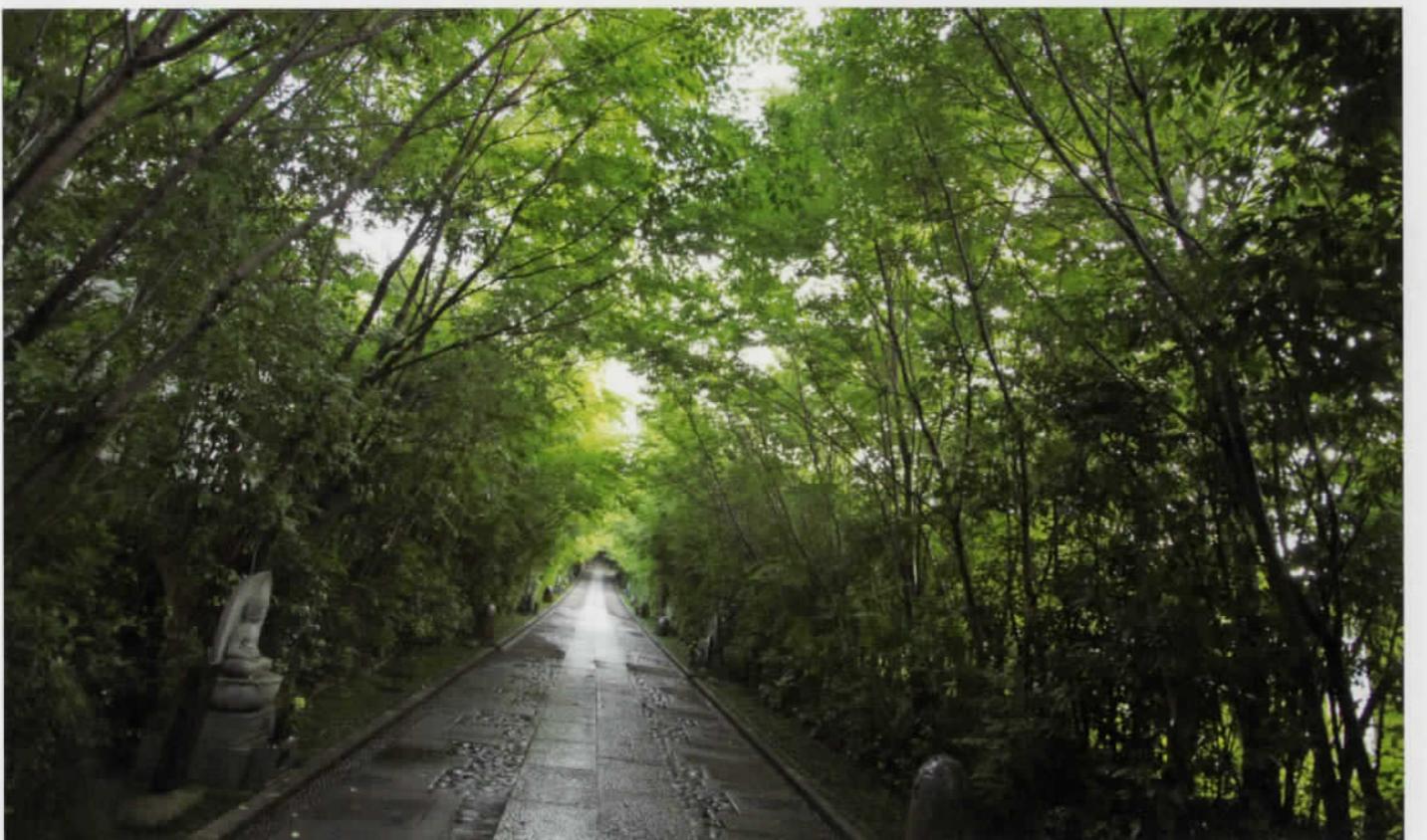


仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News

第三十五号



北山・輪王寺の参道

春野川先生：神川方義



『廣瀬川の畔』
（相馬愛蔵・黒光著作集5）
1996年 横濱出版社

(相馬黒光「廣瀬川の畔」)

恩師の墓前

文学のある風景

翌日は広瀬川の上流、瀧橋付近の講武所と称する河原に下りて、松林を逍遙し、しばらくそこに佇立すると、四十五六年前の夏の夜、月下に衣を脱いで清流に浴し、あるいは友と讃美歌を合唱したりした少女の姿を思い浮べて、それが今ここに立っている自分であることを疑わしめる。夫に促されてようやくわれに還り、妹きく子の住む中島町へと向いました。

(中略)一緒につれ立って、ここから程遠からぬ北八番丁、林子平の墓所の東隣り江嚴寺に、祖先より両親兄弟その他の墓をとぶらい、北山にまわって、多田家の菩提寺昌繁寺に礼し、丘の上に登つて、共同墓地のある輪王寺に至れば、さらに一段高きところに、恩師押川先生(を)の、自然石より成るお墓がすぐ眼につきました。あつ先生と、思わず走りより、跪づく、眼を上げれば先生の背後には、若かりしこの知人たち、當時有為の人物として嘱望された青年達のお墓が、ちょうど先生の後につき従うようにならんで立ち、石に刻まれたその名を見るほどに、私はまた少女の昔に還つた心地がするのでした。春やむかしというけれど、ここに来て私はほんとうに春や昔の感が深い、しかもここには墓碑を繞つて潤れる青春がある。その青春は私一人のものでもなければ、ここに眠る人々だけのものでもない、維新後ようよう二十年の時代の若き日本、殊に暗い東北の天地に、雪解の春の一時に訪れたような、初期基督教伝道者達の大きな氣魄と、攝りまさる魂の感激と、それを思えば老いの六十年もたちまちに消えて、何やら高い香気のようなものが、ふっくりと私をつぶんで残るのです。

読売新聞に「子どもの詩」という小さな紹介記事があつて、毎日こどもが書いた詩が掲載される。選者は詩人の平田俊子さん。これがおもしろいので必ず読む。少し前には「ゆびわ」と題されたこんな一篇があつた。

おかあさん
ゆびわたくさんもつてるね
おかあさん
たくさんけつこんしたんだね

一読、爆笑してしまった。まだ就学前の四歳、五歳の「作品」である。結婚すると指輪が贈られることを聞いて、こう思ったのであった。

小学生や、時には中学生の作品もあるけれど、年齢が下の方のこともが書いたものの方が奇想天外でおもしろい。まだ日本語に慣れていない。その新鮮さが実に輝いている。まだ文字が書けないのでこどもが話したおもしろいことを親が記録して投稿するのである。

書きの文章がわれわれに衝撃を与えた。この文章を読んでこころを揺さぶられない人はいないだろう。引用するのも胸が痛むが、新聞報道されたそれを一部書き写してお

もうパパとママにいわれなくともしつかりとじぶんからきょうよりもつともとあしたはできるようするからもうおねがいゆるしてゆるしてくださいおねがいします

「あした」ということばがこんなにも切実で身を切られるような思いがする例をこれまで読んだことがない。わずか五歳の彼女はこんなふうにも「あした」を思っていた。夢と希望の代名詞である「あした」が、あしたよりはあさつてが、上手生き々しい実体を持つ迫つてくるのであつた。きょうよりはあしたが、彼女にあつてはこんな風にもなる。できないことができるようになる。だからゆるしてほしい。この切迫した叫びの先に待つていたものはわずか五歳の命の終焉であつたのだ。

こどもが話し、書く日本語は、ときには神さまのことばのようである。一語一語が、きらきら光り、かがやいている。

読売新聞に「子どもの詩」という小さな紹介記事があつて、毎日こどもが書いた詩が掲載される。選者は詩人の平田俊子さん。これがおもしろいので必ず読む。少し前には「ゆびわ」と題されたこんな一篇があつた。

もうパパとママにいわれなくともしつかりとじぶんからきょうよりもつともとあしたはできるようするからもうおねがいゆるしてゆるしてくださいおねがいします

書きの文章がわれわれに衝撃を与えた。この文章を読んでこころを揺さぶられない人はいないだろう。引用するのも胸が痛むが、新聞報道されたそれを一部書き写してお

もうパパとママにいわれなくともしつかりとじぶんからきょうよりもつともとあしたはできるようするからもうおねがいゆるしてゆるしてくださいおねがいします

書きの文章がわれわれに衝撃を与えた。この文章を読んでこころを揺さぶられない人はいないだろう。引用するのも胸が痛むが、新聞報道されたそれを一部書き写してお

学芸室日記

○2018年5月～6月

いつも当館の行事や出来事をお知らせする本欄ですが、今回は「文学館の花ごよみ」と洒落こんでみました。季節ごとにいろいろな花が咲く文学館の庭。鳥や

虫の声も聞こえます。その様子は折にふれツイッターでも発信しています。ご来館の際は、館内だけでなく外も散策してみてくださいね。(※夏の間は虫刺されにご注意ください!)

○2018年5月19日(土)
特別展「田沼武能写真展 時代を刻んだ貌」の開連行事として、写真家・田沼武能さんの講演会を開催しました。89歳にして第一線で活躍する写真家による、エネルギッシュでユーモアあふれるお話に、聴衆たちはすっかり引きこまれました。当館の初代館長・井上ひさしを舞台稽古の現場で撮影している田沼さん。

「井上さんは優しい人だと感じた」というエピソードが印象的でした。

講演する田沼武能さん
撮影:佐々木隆二

仙台文学館ニュース

第三十五号

仙台文学館
Sendai Literature Museum

〒981-0902 仙台市青葉区北根2-7-1
TEL 022-271-3020 FAX 022-271-3044
<http://www.sendai-lit.jp/>

[表紙]佐々木隆二
[印刷]ヨーメディア
[挿画]吉山拓



再生紙使用

天才少女・北島マヤと、宿命のライバル・姫川亞弓が、演劇界の幻の名作「紅天女」の主役の座をめぐって競い合う漫画「ガラスの仮面」は、2016年に連載開始40周年を迎えました。漫画家 美内すずえ先生が長年にわたって描き続け、未だに完結していない本作品は、演劇漫画の金字塔として不動の人気を誇ります。

単行本49巻（2012年10月刊）までの累計発行部数は国内で5千万部を超え、50巻の発売、そして来たる大団円を、多くのファンが待ち望んでいます。

このたびの展示は、貴重な原画を中心に、「ガラスの仮面」の世界をあらためて振り返り、今後の展開に思いをはせることのできる展覧会となっています。また、美内先生が2017年にデビュー50周年を迎えたのを記念して、デビュー作から最新作まで、「ガラスの仮面」以外の作品のコーナーも設けます。

世代を超えて愛される不朽の名作「ガラスの仮面」。東北では初めてとなる本格的な展覧会に、ぜひとも足をお運びください！



おもな展示資料

(変更になる場合があります)

- ◆「ガラスの仮面」モノクロ原画、カラー原画、掲載誌・書籍
- ◆「ガラスの仮面」が舞台化・ドラマ化された際の資料類
- ◆美内すずえ先生へのインタビュー映像、執筆風景撮りおろし映像
- ◆美内先生の初期作品から最新作までの原画:「妖鬼妃伝」「アマテラス」など



連載40周年記念 ガラスの仮面展

会期=2018年10月6日(土)~11月25日(日)

※休館日=月曜日(10/8は開館)、10/25(木)、11/22(木)

会場=仙台文学館3階企画展示室

時間=9:00~17:00(入館は16:30まで)

観覧料=一般800円、高校生460円、小・中学生230円

(10名以上の団体各100円引き)

主催:(公財)仙台市市民文化事業団 仙台文学館

共催:朝日新聞社

特別協力:美内すずえ事務所(プロダクションベルスタジオ) 協力:白泉社

〈開催記念イベント〉

①美内すずえ先生サイン会

日時=10月20日(土)14:00~※要申し込み、定員あり

②ワークショップ「かぎ針編みで 紫のバラのブローチを作ろう!」

日時=11月14日(水)13:30~15:00

材料費=200円※要申し込み、定員あり

③「ガラスの仮面」のイラスト募集

好きなキャラクター、お気に入りの名場面、グッときたセリフなど、ハガキにイラストを描いてお寄せください!

☆イベントの内容および申し込み方法についての詳細は、配布中のチラシ、ホームページ等をご覧ください。



予告 連載40周年記念 ガラスの仮面展



展覧会のための特別描き下ろし原画 ©Miuchi Suzue



美内すずえ先生
(漫画家)

1951年生まれ。大阪府出身。16歳のとき、「山の月と子だぬき」とで集英社「別冊マーガレット」で金賞を受賞、高校生漫画家としてデビュー。1976年から連載の「ガラスの仮面」(白泉社)は開始当初よりベストセラーとなり、少女漫画史上、空前のロングセラー作品として、各界から絶大な支持を受け、TVアニメ化、ドラマ化、舞台化もされている。

学びたい！
味わいたい！

人気を集めることに迫る!!

仙台文学館の展示や資料の収集・保存においては、明治時代以降の「近代文学」を対象としていますが、毎年「仙台文学館ゼミナール」では古典文学のプログラムも開講しており、会場が満員となるほどの人気講座となっています。終了後のアンケートにおいても、「古語表現の美しさを学びたい」「古典にふれたい」「古典全般に興味がある」「古典を再読したい」……といったように、次回も古典文学を学びたいという声が数多く寄せられます。

そこで文学館スタッフが抱いた素朴な疑問——言葉づかいも、そこに記される人々の生活も、現代とはまったく異なる昔の文学作品に、なぜこんなに多くの人が惹かれるのか？

その答えに近づくべく、「仙台文学館ゼミナール」の講師を務めるお二人の専門家、津田大樹先生、横溝博先生

にお話をうかがいました。

先生が研究していること。
関心事項を具体的に教えてください。

津田先生

「万葉集」の研究に取り組んでいます。表記法も文法も現在と異なるため、まだ読み方が分らない歌や解釈の定まらない歌が残されています。古代の言語や習俗などを広く学びながら、「万葉集」の歌を読んでいきたいと思っています。

横溝先生

王朝物語（草）や歴史物語、日記文学、私家集（草）などが、どのような環境で誰によって書かれ（編纂され）、読まれていたのか（きたのか）、作品の生成と受容について大きな関心をもっています。

※王朝物語…平安時代後期から室町時代前期にかけて、宫廷の文

化・美意識などに基づいて創作された物語群の総称。

※私家集…一人の歌人の和歌を集めた歌集。

「仙台文学館ゼミナール」では、多くの方から「古典文学を学びたい」という声が寄せられます。その理由は何だと思いますか？

津田先生

古典文学を学んでいると、現代の私たちと全く変わらないような、喜びや悲しみの思いが表現されていることに驚きます。また一方では、現代の社会とは全く異なる言葉や、習俗、文化に気付いて驚くこともあります。こうした発見が、私たちの心を動かすのではないでしょうか。

文学を通して、いにしえの人々に思いを馳せるとともに、現代を生きる私たち自身を見つめ直すことができるという点に、古典文学を学ぶ意義を感じるのではないかと思います。

横溝先生

教養として古典文学を学びたいと思うこともあるでしょう。また現代の小説にないものを古典文学に求めるということもあるかと思います。日本の歴史や伝統文化に親しみ、日本人の考え方、感性みたいなものを身につけることで、日本をもっと楽しみたいという気持ちもあるでしょう。そして何より古典の世界から物事の見方や人生を豊かに生き抜くためのヒントを得られるというのが大きいと思います。



津田 大樹 先生
一関工業高等専門学校人文社会領域教授。1967年生まれ。専門は『万葉集』を中心とした古代文学。

古典文学の入門書、おすすめの本（入手しやすいもの）がありましたら教えてください。また、こんなふうに古典文学を楽しめるという情報があつたら教えてください。

津田先生

現在、書店の棚にはたくさんの本が並んでいますが、千年后にも読み継がれている本は少ないかもしれません。私たちが生涯に読むことのできる本の数は限られています。少しでも良い本をと思って、それを選別するのは難しいことです。その点、古典は歴史の中で淘汰され選別されてきたものです。

私たちの祖先が、長い年月をかけて伝えてくれた貴重な財産だと思います。私も古典文学の一字一句を大切に受け止めて、読み継いでいきたいと思っています。

横溝先生

近年では、岩波文庫、講談社学術文庫、角川ソフィア文庫など、比較的安価で手に入りやすい文庫のシリーズで、信頼できる本文と充実した注記の備わったものが増えてきました。代表的な古典文学を読むことができると思います。

また、「歌枕とうほく紀行」（無明舎出版、2004年）など、歌枕（草）の地を写真入りで紹介した本があり、古典の和歌を学びながら、そこに詠まれた身近な歌枕の地を訪ねてみるのも楽しいのではないでしょうか。

※歌枕…和歌に多く詠まれた名所のこと。
※歌枕…和歌に多く詠まれた名所のこと。

これまでに「仙台文学館ゼミナール」で取り上げた、おもな古典文学作品
『古事記』『万葉集』『蜻蛉日記』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『更級日記』
『平家物語』『義経記』『おくの細道』

※ 今年度の「仙台文学館ゼミナール」の申し込みは締め切りました。



横溝 博 先生
東北大学大学院文学研究科准教授。1971年生まれ。専門は中古・中世の王朝物語および日記文学。



先生がたのお話を通して、千年以上あいだ人々によつて読み継がれてきた作品がもつ強靭な力にあらためて感じ入りました。その力が、さまざまな娛樂や情報があふれた現代においても多くの人の心をとらえるでしょう。

ひとくちに古典文学といっても、時代ごとに、またジャンル別にたくさんある作品があります。これを機に、古典により親しんでみてはいかがでしょうか？